

## ヨガ・スタジオ

〈YogaJaya〉 代表 パトリック・オアンシア インタビュー



# パンクロックと ヨガはよく似てる

恵比寿のヨガ・スタジオ

「YogaJaya」。カフェを併設したヨガ・スタジオを連想したくなるネーミングだが、統合を意味するYOGAと「克服」「勝利」を意味するJAYAというサンスクリット語に由来している。専属スタッフは三名、十一名のレギュラー講師が所属し、会員登録している生徒は一万人を数える。ヨガJayaが他のスタジオと異なるユニークな点は、単に受講者にヨガのポーズを教える活動にとどまらず、世界の第一線で活躍する異なるバックグラウンドを持つたゲストを招き、より深い部分へのアプローチを試みようとしているところにある。代表をつとめるパトリックはカナダ出身で元パンクバンドのメンバーという異色の経験の持ち主。世界各地でヨガの講義を行っているために一年の大半を海外で過ごす日々を送っている。彼と話をしていると、ヨガ・スクールの経営者というよりも自己の真理を掘り下げながら探求の旅を続

けている研究者やジャーナリストと対話しているような錯覚を覚えることがあった。

## システムとの闘争

——子供のころは自転車競技のプロ選手を目指していたそうだね。どんな少年時代を過ごしていたのか教えて。

パトリック 自転車競技のプロ選手になるのは僕にとって幼い頃からの夢だった。カナダのローカル・チームに所属して、いつかはオリンピックの選手になりたいと考えていたよ。僕の母親はスペイン出身なので、その影響でヨーロッパの自転車レースいつも身近に感じていたからね。一〇代中頃まではハードに練習していたんだけど、スケートボードや音楽の世界に引き込まれていくうちに、いつのまにか自転車の夢はどこかに行ってしまった。

——お父さんは、どこの国の出身なの？

パトリック カナダで生まれているけれど国籍はルーマニア。祖父母は二〇世紀始めにルーマニアからカナダに移住してきた移民だつた。父は中国の文化大革命の最も深刻なときに西洋人として中国滞在を許され

た数少ないジャーナリストの一人で、カナダの新聞社のロンドン支局の立ち上げに尽力したり、カナダのピューリツァー賞にあたる栄誉ある賞を授かったこともある。

父と母はロンドンで出会って結婚し、中国に滞在中に僕が生まれた。父はジャーナリストとしての役目を終えてからも、カナダの大学機関でジャーナリストを育成したり、地方新聞の編集長、テレビの論説員をつとめたりしていた。母親は大学でスペインの歴史や文学を教えていたね。

——子供時代に父親の影響を受けたと思っていたよ。僕の母親はスペイン出身なので、

パトリック いや、父親には反抗ばかりしていたから影響は受けっていないよ。むしろ家では厳しく勉強させられたせいです。父親は「教育を受ける権利」を主張して、三年に渡って学校と闘争を続けた結果、裁判で勝つたけれど、最終的には学校に戻らなかったことにしたんだ。両親は僕が嘘をつけないと信じてくれたけど、どれほど傷ついたか関心を寄せてくれなかつたことが悔しかつたよ。あの時代の過酷な体験を通じて僕はすっかり学校とシステムが嫌いになつた。そして、あのときの体験は今の僕の人格を形成するうえで重要なモチベーションを与える結果となつたんだ。十五歳の僕はパンクロックに傾倒していく、学校で学校を離れ、十六歳のときに一人でモ

ら先生からも差別を受けて何度も停学させられた。三度目に学校を停学させられたとき、母親が校長と面談することになった。校長室の壁越しに話を聞いていたら、校長は僕がチーンやナイフで友達を脅したと嘘をついたんだ。その話を聞いた両親はひどく落ち込んだ。僕が学校で酷い差別を受けた事実も去ることながら、学問の道が絶たれたことに落胆したんだ。父親はジャーナリストとしては出世したけれど、大学を出ていかなかつたがために職に恵まれず苦労した。僕が教育を受けなかつたら同じような困難に直面すると思いつこんでいたんだね。父親は「教育を受ける権利」を主張して、三年に渡って学校と闘争を続けた結果、裁判で勝つたけれど、最終的には学校に戻らなかつたんだ。両親は僕が嘘をつけないと信じてくれたけど、どれほど傷ついたか関心を寄せてくれなかつたことが悔しかつたよ。あの時代の過酷な体験を通じて僕はすっかり学校とシステムが嫌いになつた。そして、あのときの体験は今の僕の人格を形成するうえで重要なモチベーションを与える結果となつたんだ。十五歳

トリオールへ旅立つたあとは、「一度と「後ろを振り返る」ことなく、思う存分パンク口ツクを楽しむことになつたのさ(笑)。

## パンク・ロック・ユニット一覧

抵抗の歴史

時代が始まるわけだね。

ハトリック しれゆる「抵抗の歴史」たる  
「抵抗」といっても、むやみに「反抗」する  
のではなく、自由に発言し、自己表現する

の人はパンクといえば、むやみやたらと攻撃的でナンカばかりして、まる連中というイ

メッセージを抱きがちだけど、仲間と連帯してシーンを作り、ライブ・ツアーやを通じて絆

を深めていくというのがパンクの基本理念。パンクロックの連中が好んで使う「パ

ズも、個人に自由を与え、自主性を獲得するためこ運営せよといふ前向きな意味で使

われる言葉なんだよ。これはヨガの思想にも通じる考え方だと僕は思っているんだ。

——権力に頼らずに全て自分たちでやろう  
という思想、いわゆるドゥ・イット・ユア

パトリック その通り。レコード・レーベ  
ル、ライヴ・コンサート、虫目(イギリス)

…それらを生み出そうとする意思が有機的

に繋がつていつて一つの大きなムーヴメントを生み出していった。おかげで今やパン

クロックは巨大な音楽産業の一部になつてゐるけれど僕らの時代はそうではなかつた。バンドでツアーをしても一回のコンサートで千円程度のギャラしかもらえず、それで五人のバンドメンバーと一人の口笛を喰わせていくのは並の苦労じやなかつた。ガソリンも買えないし、眠る場所すらないから、車の中で重なり合いながら眠つていたよ。みんないつも空腹で、ひもじい思いを抱えていたから喧嘩も絶えなかつた。いま振り返つてみると恐ろしく過酷な日々だつたけど後悔はしていない。むしろ自分にとつて輝かしい時代だと思つているよ。

——なぜ、それほど苦労をしてまでパンクバンドを続けたんだろう。

パトリック　社会が決めた枠を超えて、本当の自由を手にいれたいと思つていたからさ。大手資本や権力に頼ることなく、自分たちにとって理想的なアート表現をしていこうという気持ち、自家発電的に自力でコトを起こして、自分たちの手でコミュニケーションを作りたいという衝動が困難に勝つたんだね。とても険しい道のりだつたけど、強いやりがいを感じていたよ。実際、パンクの思想は多くのもの——インディ・レーベルや独自のコミュニティ、インデペンデント・メディアなど——を生み出している。今ではメジャーな『モントリオールミラー』というタブロイド新聞（カナダで配布されている無料の新聞。政治、精神世界、音楽、芸術や文化を扱う）も、パンク的な思想を

持った連中が約二〇年前に創刊したものです。八〇年代のモントリオールは北アメリカで最も先進的な町のひとつで、良質なカルチャーやパワフルな音楽やアートが数多く生み出されていた。フランスとイギリスの植民地だったので、アフリカ、ユダヤ、中国、ベトナムと、多様な人種のコミュニティが混在していて、カナダの他の都市と比べるとオープンでリベラルな気運にあふれていたよ。パンク・シーンから派生して、ヨガとの偶然の出会い

——なぜ日本を選んだの？

バトリック それまでの生活のリズムを変えたかったんだね。ワーキングホリデー文化交換ビザで日本に来て、文化を体験しながら仕事をしてアジアを旅したいと思ってた。でも、下北沢のバーで知り合った

独自の表現活動を続いている連中は他にも大勢いるよ。

——パトリックにとってのパンク時代は、いつまで続いたの。

ハトリック 僕がハンクに没頭していたのは七八年からの約一〇年間で、八六年からはSCUMといふ、当時カナダではかな

り人気のあつたバンドに加入して、全国を移動しながらライブを繰り返す日々を二年

ほじ続けられた。のひこゑは SOCIETY  
CONTROLLED UNDER MURDERS &

略[編註]・「殺人者」にコントロールされた社会」という、いかにもパンクなネーミング。直訳すると「『人間のフグ』」(う意味)。や

はり貧しくて過酷な日々の積み重ねで鬱憤がたまっていたんだろう、ある日バンドの

リーダーとの意見の相違から、「もう、こんな生活たくさんだ!!」とバンドを辞めて、

日本に行くことにしたんだ。八九年のことだね。

——なぜ日本を選んだの？  
パトリック　それまでの生  
えたかったんだね。ワード  
化交換ビザで日本に来て、  
がら仕事をしてアジアを女  
いた。でも、下北沢のバ  
ミュージシャンから彼の、  
わないかと誘われて、まち  
き込まれてしまつたんだ。  
後に自分もバンドを組んで、  
イブハウスで二〇〇〇年半  
八〇年代後期から九〇年半  
クトロミュージック・シ  
わるようになつてDJ活  
——その頃はバンド以外の  
た？  
パトリック　フリー・ラン  
ションのモデルや映画のコ  
カラーストランのウェイ  
ダーなど色んな仕事をこ  
入れ墨が増えるのに反比例  
ルの仕事も減つていつて、  
界に深く真剣に関わるよ  
——ヨガに興味を持った西  
パトリック　きつかけは  
ワン・シリ・ラジニア、

ハトリック きかげは OSHO (ハグ  
ワン・シュリ・ラジニーシ)だね。

——オショウ!?

ハーリー、今、アラスカの飯の屋でアーノルド  
していたときに、たくさんの美しい女性達

と知り合つたんだ。彼女たちはOSHOがインドに作った「ラジニーシ・ダム」というコミニーンの出身で、彼女の両親はサニヤシンと呼ばれるOSHOの弟子だつた。八〇年代後半から九〇年代初頭の東京には、彼女たちのようなサニヤシンの娘達が出稼ぎに来つていて、六本木でホステスやモデルとして働いていたんだ。

——その当時の六本木の夜つて、どんな感じだったのかな。

パトリック アシッドハウスやテクノのアンダーグラウンド・パーティが頻繁に開かれていて、そこにはサニヤシンの女の子たちも遊びに来ていた。彼女達からOSHOに関する話を聞くうちに、彼の哲学に興味が湧いてインドへ足を向けることになった。

——へえ、どんな思想か気になるな。

バトリーク 実を言うと：インドに行つた理由の一つはインドに戻つた彼女たちのうちの一人を追いかけていたわけなんだけど。いざインドに着いたら彼女は他の男を見つけてどこかに行つてしまつた(笑)。とても落ち込んだけど、一人ぼっちになつた僕はラジニーシ・ダムに残つて、そこで初めて本格的にヨガと瞑想を体験したんだ。九〇年代初頭のことだね。

——それがヨガとの出会いでもあつたのかな。

パトリック そうだね。でも、それは單なる「きつかけ」に過ぎず、本格的にヨガと向き合うようになつたのは数年後のこと

だ。その頃は音楽活動も続けていたし、世界的に盛り上がつていてテクノやアシッドハウスやトランス・ミュージックのアンダーグラウンドなパーティに遊びに行くのが楽しかつたんだ。九〇年代はじめの東京はバブル経済の余波が残つていて、モデルの仕事を月に二本もやれば残りの四ヶ月は何もしくていいくらい景気が良かつた。アングラ・パーティの会場でも「何をやつても良い」というような自由な雰囲気が漂つていて楽しかつた。警察も何が起きているかわからなかつたし、まさに無法地帯だつた(笑)。あの頃のパーティ・シーンは精神世界と深いところでつながつていたんだ。シーンを支えていた人たちの多くはトラベラー出身で、彼らの多くがインド文化や精神世界の影響を受けていたからね。

### スピリチュアル界の異端児OSHOの教え

——インドでの経験をきっかけに精神世界を意識するようになつたわけだね。

パトリック 僕がラジニーシ・ダムに行つたとき、残念ながらOSHOはすでに亡くなつていたけれど、彼が生前に残した多くの講話(ダルシャン)をブツダ・ホールと呼ぶる瞑想部屋で聞いたりヨガをしながら精神的な世界に触れることができた。あるときOSHOの講話を集めた本を勧められて、それを読んで、とても衝撃を受けたんだ。なぜならパンクロックに傾倒して

いた時代に学んだ哲学の全てが、そこに書かれていたからさ。「自由とは何か」、「自己探求することの意味」、「自分にとつての真実を見出すことの必要性」…。それまで僕は「スピリチュアル」と言わせているものに對して嫌悪感を抱いていたんだ。スピリチュアルという言葉を口にする人たちは、みんな怪しくて、傲慢で、いかにも心が浮いていたりする人という印象があつたからね。はじめはOSHOも同じように怪しいやつかと思っていたけれど、本のなかで彼が語ついていることは：完全な反逆者、パンクロックに通じる思想だつたんだ。

——OSHOの講話の原則、主張というのは、どういうものなのだろう？

パトリック あえて簡単に言うならば「社会の常識やルールを捨て去つた先に、自らの真実を見い出す」ってことかな。

OSHOの教えの原則は、哲学や宗教について彼がリサーチしたこと、そして得られた知識がベースになつていて。彼の願いは、スピリチュアリティの探求は、人が作つた宗教の慣習で厳格に統制されるべきではないということを、人々に理解させることで何か大きな可能性が生み出せるという考え方たは、まるでパンクの理念そのものだ。パンクバンド時代に僕たちが目指していたことは、仲間どうしが助け合いながら「共存」し、自分たちの手で「独自」にレコード・レーベルやメディアを作り、シーンを築きあげることだつた。これらはいずれも「自由」や「オリジナリティ」や「独立心」を培つていこうとする精神から始まつた動きだ。巨大資本や権力からの自立を重んじる考えはパーティ・カルチャーやサブカルチャーとも通じるところがあるよね。

——サブカルチャーの世界も「スピリチュアル」のイメージによって作られてきた多くのルールが、スピリチュアリティと個人の責任についての、眞の理解を手にする可能性を遠ざけてしまつていると教えていたんだ。OSHOとの出会いを期に「スピリチュアリティ」のものに対する自分の考えが変わつたよ。

——これまで怪しいと考えていた「スピリチュアル」のイメージがパトリックのなかでは、どう変化したのだろう。

パトリック 自分は実は子供の頃から「スピリチュアル」な人間であつたということ。そして「スピリチュアリティ(靈性)」を深めていくことで自己の可能性を深めていくことに気がついたんだ。「スピリチュアリティ」を深く追求することで「自立心」が芽生え、人と人が「融合」し「共存」する。そうすることで何か大きな可能性が生み出せるという考え方たは、まるでパンクの理念そのものだ。パンクバンド時代に僕たちが目指していたことは、仲間どうしが助け合いながら「共存」し、自分たちの手で「独自」にレコード・レーベルやメディアを作り、シーンを築きあげることだつた。これらはいずれも「自由」や「オリジナリティ」や「独立心」を培つていこうとする精神から始まつた動きだ。巨大資本や権力からの自立を重んじる考えはパーティ・カルチャーやサブカルチャーとも通じるところがあるよね。

アル」と無縁ではない?

パトリック そうだね。たとえばトランス・ミュージックのパーティでは、サイケデリック体験や音楽を通じて現代社会の常識を超越し、人の心を隔てるアイデンティティやレッスルという概念を捨て去り、より深いところで人と人が繋がることが重要とされている。超越というのは全てが解け合つてひとつになるということだ。ダンスフロアで音楽に合わせて無心で踊っているとき、お互い言葉は交わしていないけれど、そこに居る人たちと「繋がっている」と感じることがあるだろう? トランス・ミュージックとダンスは、とりわけインドや中南米やアフリカのような部族的な社会では精神的な世界を旅するのに欠かせない要素であるだけだけど、強いエネルギーで結びつくための通過儀礼とでもいうような儀式的な交歓を、現代のトランス・ミュージックの世界では音楽を通じて擬似的に体験しているわけだよ。八〇年代から九〇年代にかけてアジアやヨーロッパを中心に巻き起こったトランス・ミュージックのムーヴメントは世界に波及して、独特な文化を生みだした。九〇年代の日本で小規模だけれども質の高いパーティが各地で開かれていた。いまでは一万人を超える規模にまで成長したパーティも多いけど、大衆化しきたトランス・シーンは何かを育む環境ではなくなってきている。僕は今でもパーティ・カルチャーは重要だと考えているけれど、今は《YogaJaya》のプロジェクト



パンクバンドSCUM時代のパトリック

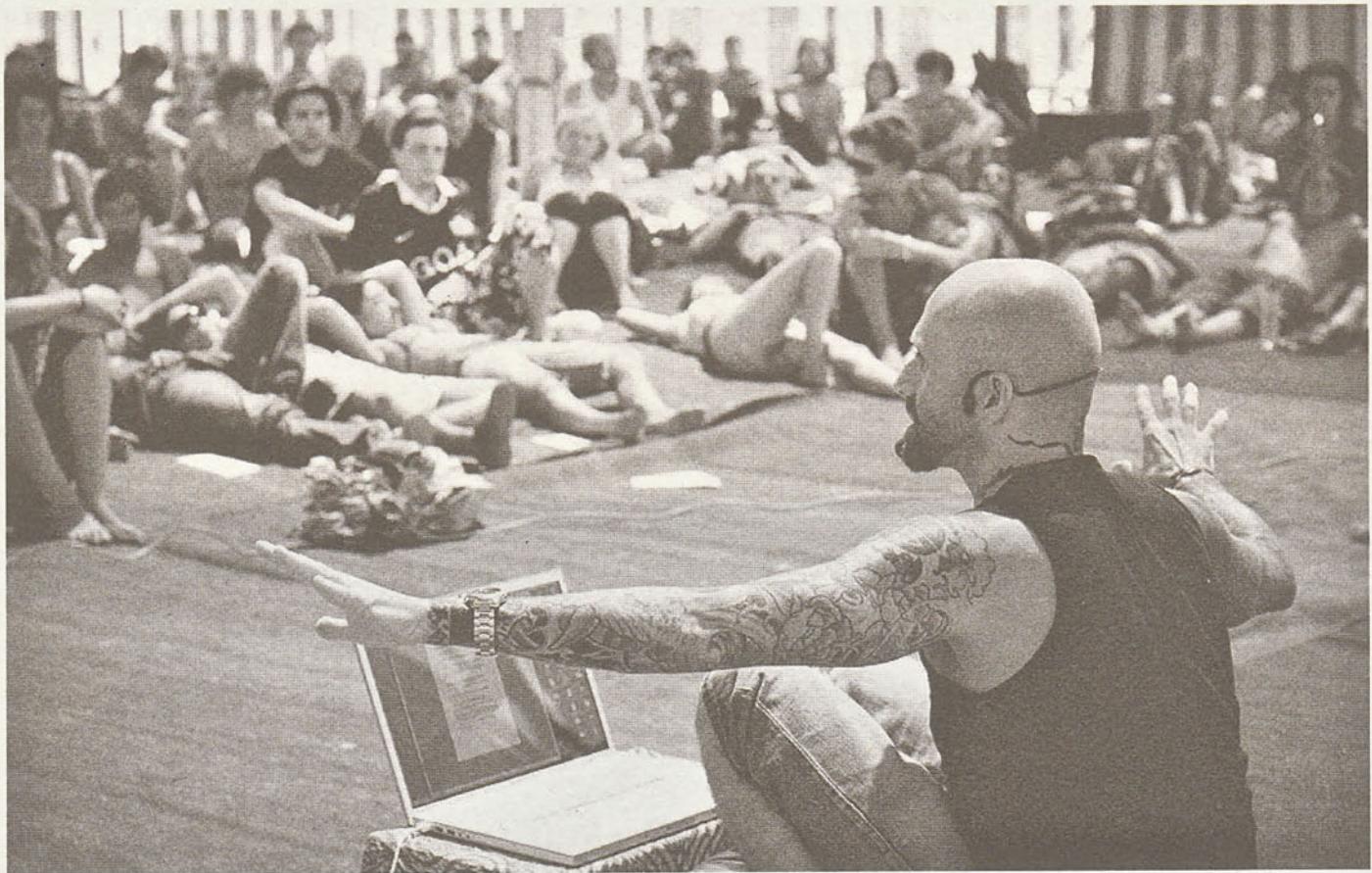
クトを通じて新しい方法を模索したいと考えている。

人は誰もが自由に生きられる

——具体的には、どんなことなのかな。  
パトリック ヨガのレッスン以外にも色々な「プロジェクト」を通じて多くの人にショックを与えたいと考えているんだ。ショックといつても、一人の人生をボロボロに破壊したいというわけじゃない。むしろその逆で、誰もが「自由」になれることが理解してもらうために刺激を与えるんだ。自分の可能性は自らで開花させることが出来る、人は誰もが力を持っている。そういうことを伝えた。それは《YogaJaya》のメインのビジョンでもあるんだ。

——「人は誰もが自由になれる」を伝えるために、具体的にはどんなことをしているの?

パトリック たとえば現在《YogaJaya》が開催している「ティーチャートレーニング・プログラム」は、各国で活躍するヨガ講師、アーティスト、代替医療のスペシャリスト達を招聘してヨガのプラクティスをはじめとして、解剖学や生理学、哲学、文化・社会・環境学のレクチャーをしてもらう講座なんだけど、講師をピラミッドの頂点に据えて講釈をたれるだけのものではないんだ。講師のありのままの考え方を提示し、その真意を参加者が自らの力で理解し、な



インターナショナル・ヨガアライアンスに公認されたヨガ講師でもあるパトリックは、国内外のさまざまな場所でレッスンをおこなっている

「こうでなければいけない」と決めつけるのではなく、参加者が主体的に選択すると、ということだね。そのような機会を与えるのが重要だと考えているんだ。ヨガと直接関係がない分野で活躍している人たちともコラボレーションしたいといつも思つていて、実際にそうしてきているんだ。例えばロック・クライマー。彼らは自分が落下するかもしれない恐怖と常に向かい合いながら、それを超越していく行為に挑んでいるわけだけよ。ある意味、超人的な体験とも言えるけれど、そのような感覚や知恵を知ることで、(重力からも)自由になれるといふことを多くの人に伝えていきたいんだ。

——参加者の意識を変えていくことで、社会状況を変革したいと考えているというとかな。

パトリック　社会全体を変えたいというよりも、まずは一人一人を目覚めさせたいんだ。それぞれの個人が自らの可能性を把握するところからはじまつて、既存の社会のルールに頼つたり、それに抑圧されずに生きていけるということに気づいてもらいたい。自分自身の可能性を理解できれば、自分の身の回りの環境に対する感度も高まつて、より平和で共生可能な社会のあり方が自然と生み出されると思うんだ。そうすれば人々が分け隔てられたりすることもなく、相互理解も可能になる。

——現在の社会では多くの人が抑圧されている。

パトリック　たとえば現状の教育システムを別の角度から見てみると、眞面目に勉強すれば学校のクラスで一番になって、良い仕事に就けて、収入も増えて、高級な車や家や服が手に入るということばかり教えている。だけど、そうなればなるほど様々な階層で分断が起るんだ。高収入・高学歴の人たちは低レベルの層とは「コミュニケーションをしなくなるし、そうなると結果的に恒常的に格差が存在し続けるわけだよね。根本的には同じ人間なのに隔たりを生み出す仕組みが、システムによって生み出されている。何をしたらハッピーか、今やっていることで自分は満たされるのか。そういうことを意識するところから始めるべきだと思うんだ。もつとも効果的な方法は何も持たずに裸で自然の世界に入つていてみることだ。社会のストレスが存在する環境から身を引いて静寂の世界に入つてれば、既存の社会に対する視野も広がっていくだろう。

### 仕事は社会を変えるか？

——「仕事」とは何だと思う？

パトリック　ティーチャートレーニングの会場で、よくこんな質問をするんだ。「自分の仕事を心から愛している人はいますか？」そう聞かれて手を上げる人は三十人中せいぜい一人か二人。つまり、この特集のテーマである「本当に好きなことを仕事にしたり、自由に仕事をする」ということ

を、大半の人はやれていないわけだよ。ルイ・ヴィトンのカバンやアルファロメオ社の車のために自分を抑えて、我慢しながら仕事をしている人が大半なんだ。自分にとつて真の自由を求めるおざなりにして、物質的な社会に機能するために生きている。ルイ・ヴィトンのカバンが悪いと言っているわけじゃないよ。ビジネスの世界に没頭することで前向きに生きることも可能だと思う。だけど自分の可能性を人に売つてまで車を手に入れるべきだろかというと疑問だね。

——ビジネスや経済が人間の可能性を閉ざしてしまっているということかな。

パトリック 地球はますます修復不可能な状態に陥りつつある。政府や権力に動かされて生活環境も過酷な状況へと追いやりされている。ところが、困ったことに多くの人が社会のなかで「どう動くべきか」「何をしなければいけないか」という判断を常に強いる。都會で生活していくも、さまざまなもの刺激と触れ合いながら、ある程度まで心を満たすことはできる。心が満たされられないおかげで、自分のことしか考えられなくなっている。地球環境や身の回りで起こっている問題への無自覚が、貧困とは難しい。もちろん単に反抗すれば良いというんじゃないんだけど、何かを恐れるあまり安全な路線を進んではかりいると無意識のうちにプレッシャーをためこんでしまうことになる。このプレッシャーといふやつはヘヴィなんだ。そして、いつか抑えきれなくなつて爆発してキレたり、犯罪が起きたり、信頼関係が崩れたりして、本当の意味で人が繋がる可能性が連鎖的に壊れていってしまう。それを取り戻していくのに最も簡単な方法は、家や職場で、ほんの僅かな時間だけでもいいからヨガやストレッチや正しい呼吸法を試してみること

だ。そうすれば人はリラックスできて神経的にも身体的にも健康になつていくし、神経系が健全な状態になれば意識も拡大して、次第に自分の可能性も見えてくる。まづ僕が伝えたいのは、そのことだ。自分自身の可能性を理解することができれば、より広い次元から物事を捉えることができるんだ。

——視野が狭くなることの弊害ってなんだろう。

パトリック 地球はますます修復不可能な状態に陥りつつある。政府や権力に動かされて生活環境も過酷な状況へと追いやりられている。ところが、困ったことに多くの人が社会のなかで「どう動くべきか」「何をしなければいけないか」という判断を常に強いる。都會で生活していくも、さまざまなもの刺激と触れ合いながら、ある程度まで心を満たすことはできる。心が満たされられないおかげで、自分のことしか考えられなくなっている。地球環境や身の回りで起こっている問題への無自覚が、貧困とは難しい。もちろん単に反抗すれば良い

——今後、いまの仕事を、どのように発展させていきたいと考えている？ 例えば、を広げることは重要だと僕は思う。インターネットや移動の技術が進化したおかげで、過去六〇年を費やしてもできなかつたことが、わずか数年で可能になつていて、たとえば九〇年代には多くの若者たちが旅に出で、異なる文化を見聞きしたり、体験したことなどが新しい視点を生み出すようにして、空間を使いこなしたいという感覚があるんだ。会社の規模を拡大するとか支店を増やすというよりは、より多くの才能を持つた

さまざまな価値転換が起こっている。それにもなつて仕事の環境も大きく変わりつつある。仕事を通じて心身ともに満たされることは、どうしたら良いか？ みんな答えを探しはじめている。価値観が急激に変化する社会を生き延びるために、生活をシンプルにしていくというのも答える一つだろう。現代社会を否定して、田舎に引っ越したり、コミュニケーションをはじめたり、農業をはじめることで持続可能な生活を手にいれる方法もある。それも一つのチョイスだけど、あえて都会のなかに身を置きながら自分で生活していくことも、さまざまを高めていくことだつて可能だと思つてゐるんだ。都會で生活していくも、さまざまのメンバーとして二年ほど活動した後に脱退、八九年から日本で暮らしへ始める。ミュージシャン、DJ、フリーランスのモデルなどの職を経て、〇四年に表参道にヨガスタジオ(YogaJaya)を開設。建物の改築にともない〇六年から場所を恵比寿に移し、現在に至る。

#### 取材・構成 青野利光

**YogaJaya**  
代官山／恵比寿スタジオ  
東京都渋谷区恵比寿西  
1-25-11-2F  
Tel: 03-5784-3622  
YogaJaya ホームページ  
[www.yogajaya.com](http://www.yogajaya.com)

ションできるような環境を育んでいきたいね。今ちょうどウェブを新しくしているところなんだけど、ウェブの中でできることもある。仕事を通じて心身ともに満たされることは、どうしたら良いか？ みんな答えを探しはじめている。価値観が急激に変化する社会を生き延びるために、生活をシンプルにしていくというのも答える一つだろ

——「コミュニケーションなど」を追求して、同じ意識を持つた人が集まれる「場」を作つてみたいね。■